

遠13
2378
132

ゆと行さらしへ
十冊につゝしをもて
おもつゝるるをもらく
うさよのこゝをもて
しゝれされどいうりくを
ようろうるゝゆるくうりくを
ほゝわらしくるゝほゝ
ほゝゆるさをもゝゆるくを
めでくたしく

稗官小説 一大奇書

酒落齋式亭三馬戯作
一雄齋歌川國貞画圖

任俠中男鑑

全部七巻

書物類錦繪草紙問屋 鶴屋金助開鐫
江戸田所町新道雙鶴堂
文化十二年乙亥五月上浣脫稿 全十三年丙子正月雜具發市





春至百花繁
名園蛺蝶翻
美人將扇撲
撮得一雙飛

明人詩 三馬錄

書中利益のいろ〳〵ありてこと
ばもつゞきあやまりおほくこゝに
しるすにおよばず 三馬



男伊達

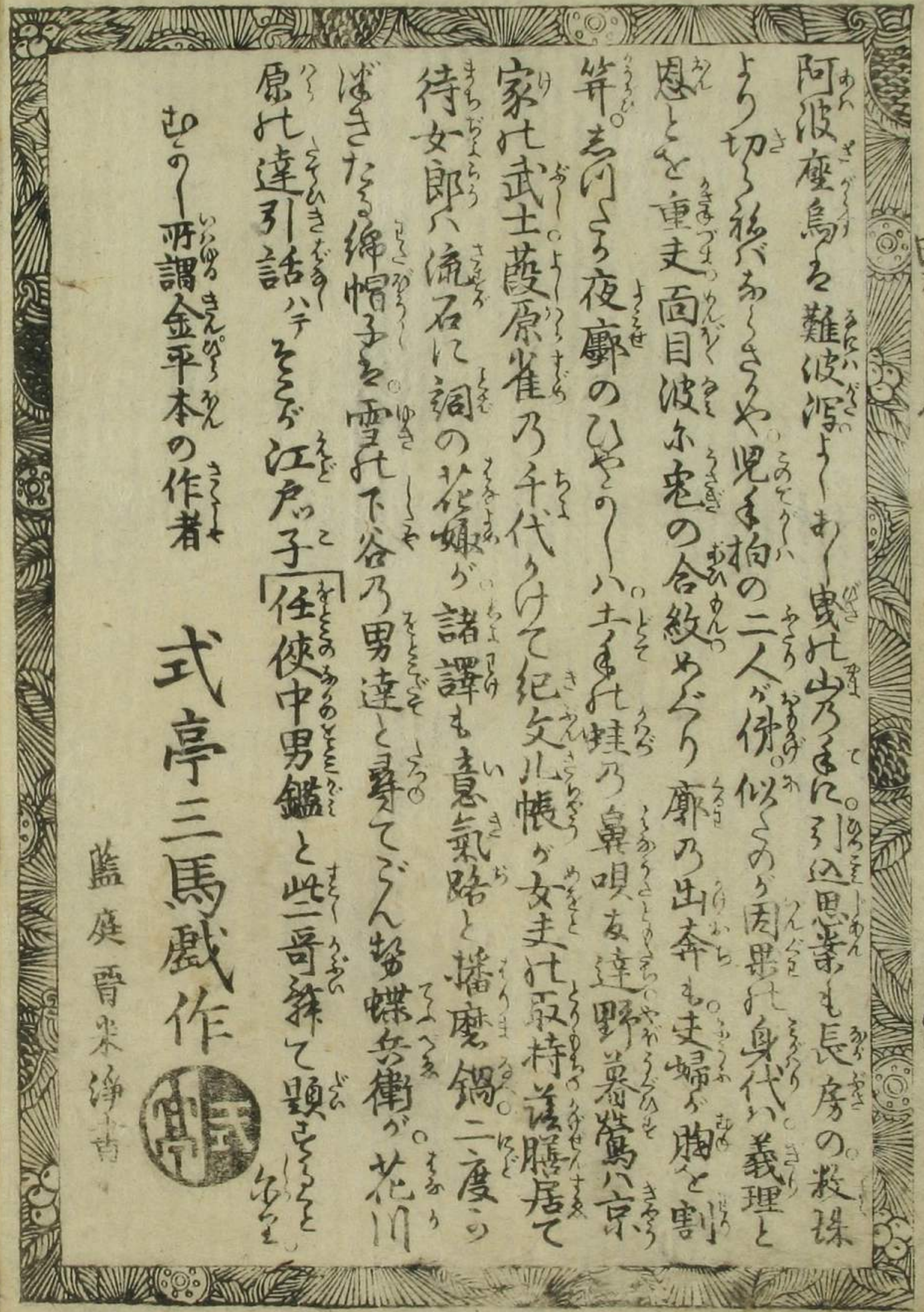
父ゆゑまでのあらゝ
ばかりのそのうち



又ひとくさのそのうち

三浦屋儿帳

大うそ三浦屋



阿波座鳥を難波潟ようまい曳れ山ろまに引込思案も長房の救操より切ゝ移ゝさゝや児を抱の二人が併似くのり困果れ身代り義理と恩とを重走面目波ふ鬼の合紋めぐり廓の出奔も主婦ゝ胸と割笄。若何ゝ夜廓のひやの〳〵八土ま乳娘の鼻唄友達野暮鶯八京家れ武士殿原雀乃千代うけて紀文儿帳が女主れ取持旨膳居て待女郎八流石に詞の花嫁が諸譯も意氣路と播磨鍋二度ゝぼきたゝ締帽子を雪れ下谷乃男達と尋てごん蝙蝠兵衛が花川原れ達引話ハテそゝぶ江戸子任俠中男鑑と此二哥舞て題さゝとむの〳〵呼調金平本の作者

式亭三馬戯作

監庭晉来浄書

○こんすの蝶与吾妻
山晴
○一子
蝶松

○あげ
調
お蓮
○割竿

○大磯三浦屋乃遊君
八帳

四方真頬

○梶原の家臣
矢作
辰之進
娘
お弓

○鎌倉雪乃下谷
の使客
蝶与吾
隠
蝶兵衛

○鎌倉の町人
紀の国や文蔵

○梶原家の重宝
正宗の短刀

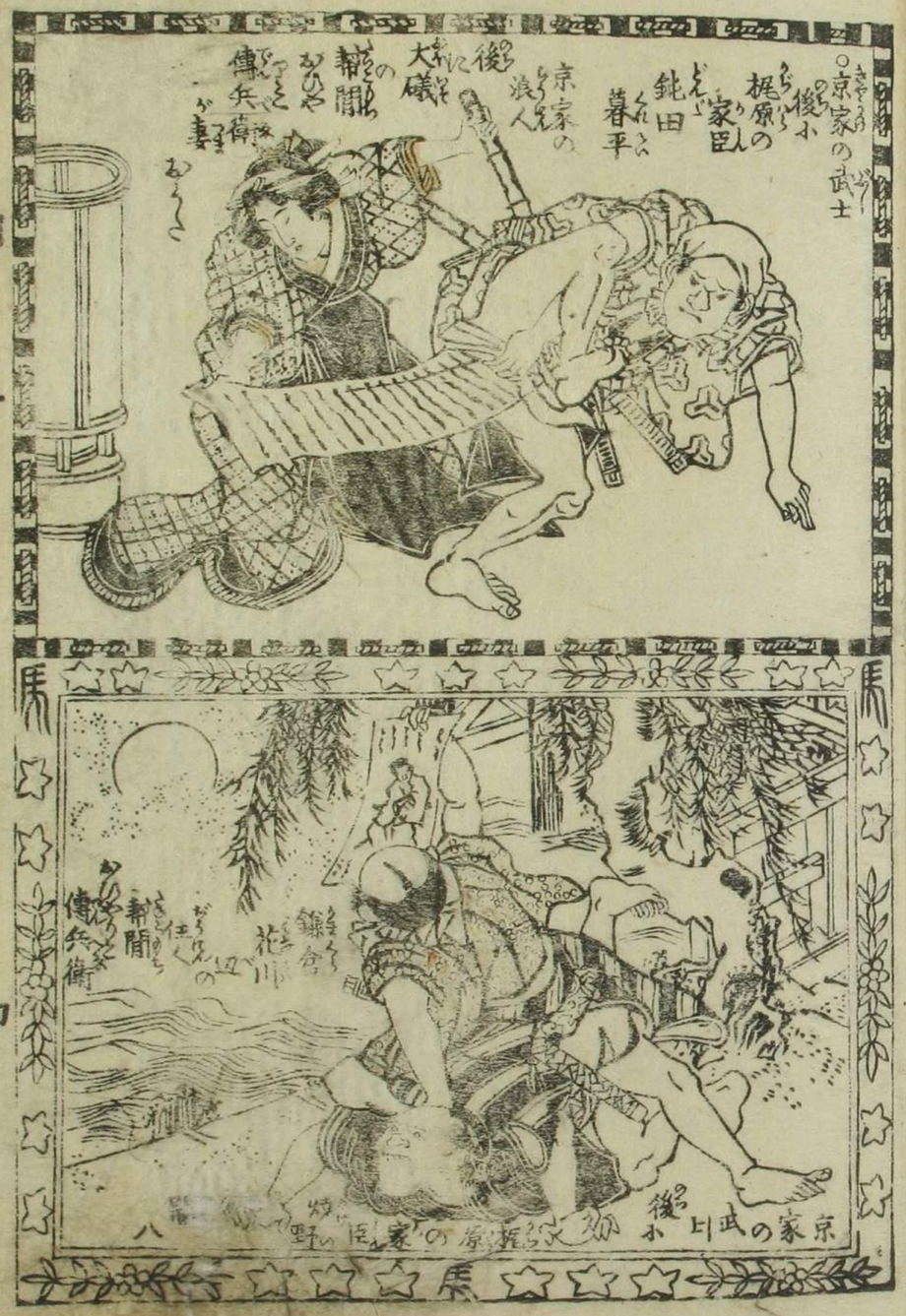
宵戒湯の湯気

まことの客共数〳〵

遠掛山人

○鎌倉の山の手
花柳
調
兵蔵
浪平
の
仕使ふり


紀
○梶原の
家臣
矢竹辰之進
○三光
坊湛海の描
紀文が實母
○三都の
札賦が列人
也松多柱の東六
○在兵衛の孫娘
○紀の国屋
善代松六
○相州三浦の農夫
在兵衛
箱帳


○京家の武士
後ホ
梶原の
家臣
鉈田
暮平
京家の浪人
後
大磯
傳兵衛が妻
の
新間
傳兵衛
後ホ
京家の武士
炒野
の
新間
傳兵衛
花川
辺
鎌倉
の
住人

鎌倉荏柄天神社内乃体

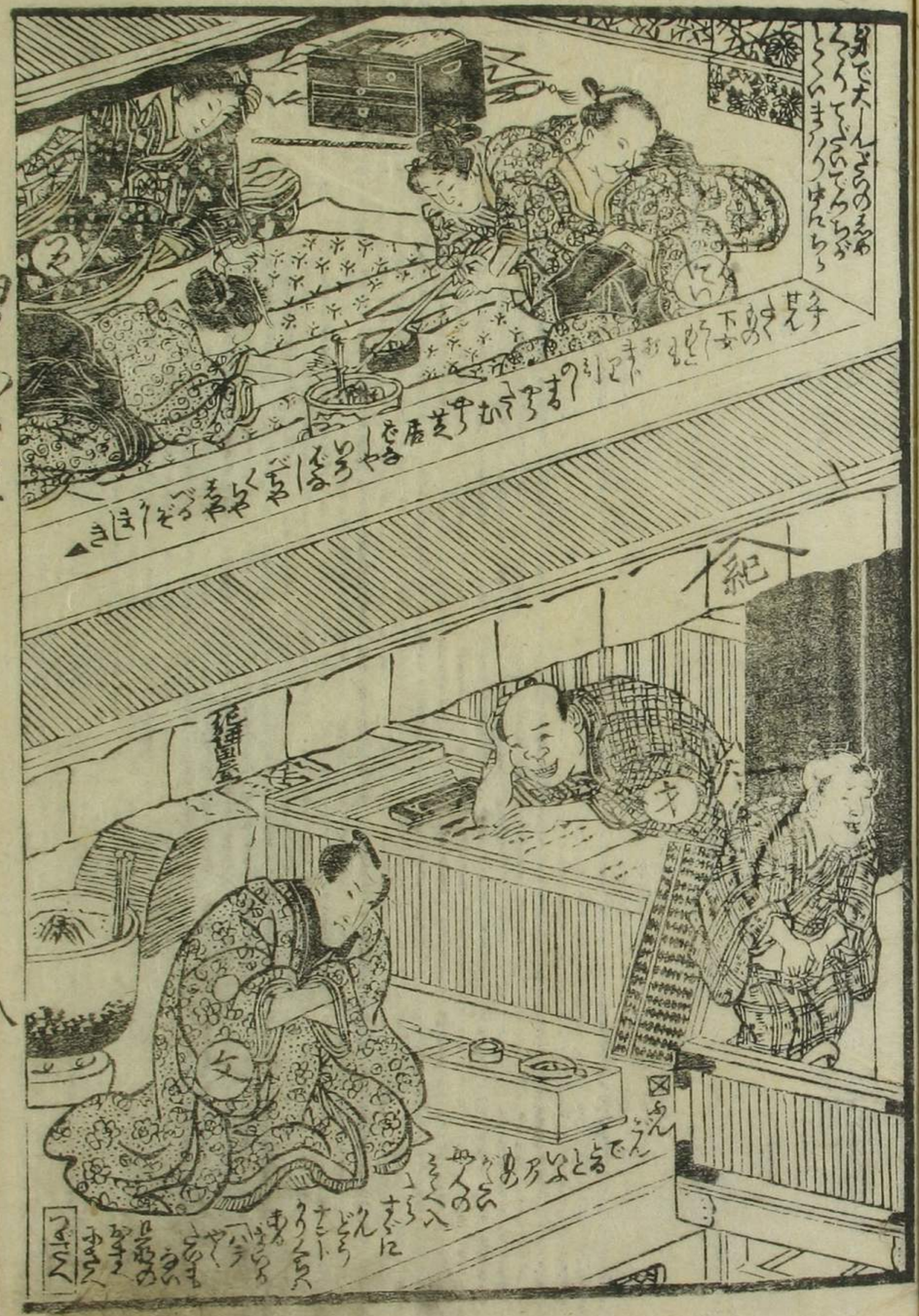
初詣


文
やん

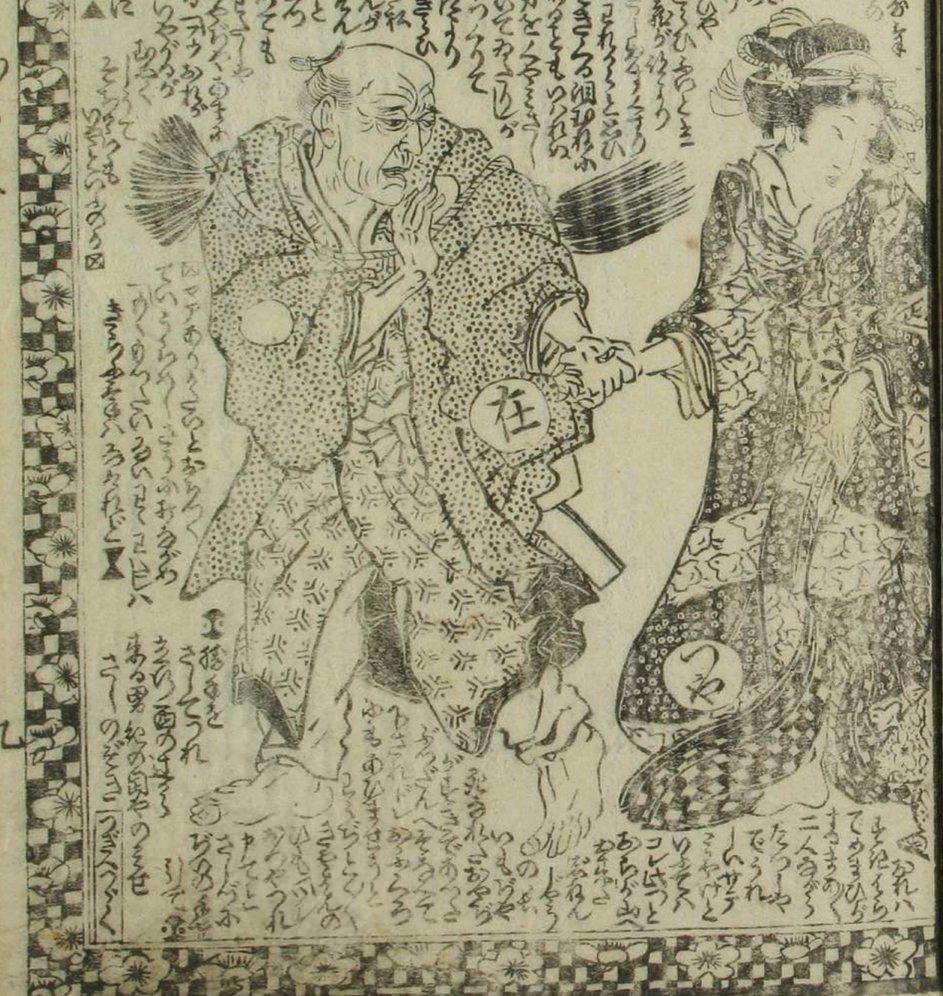

文

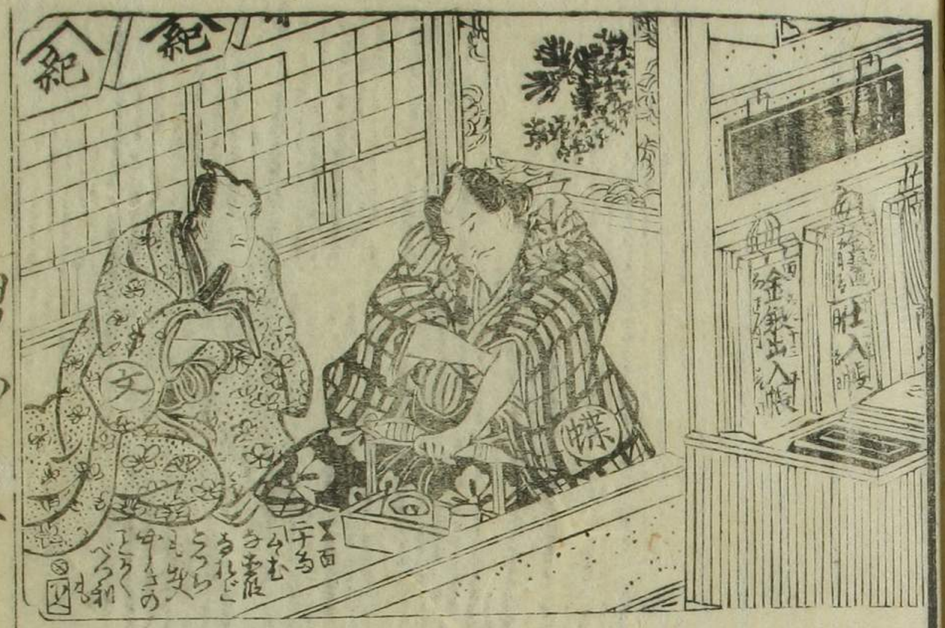

文


東
蝶


紀
女


文
東
文


在
つや



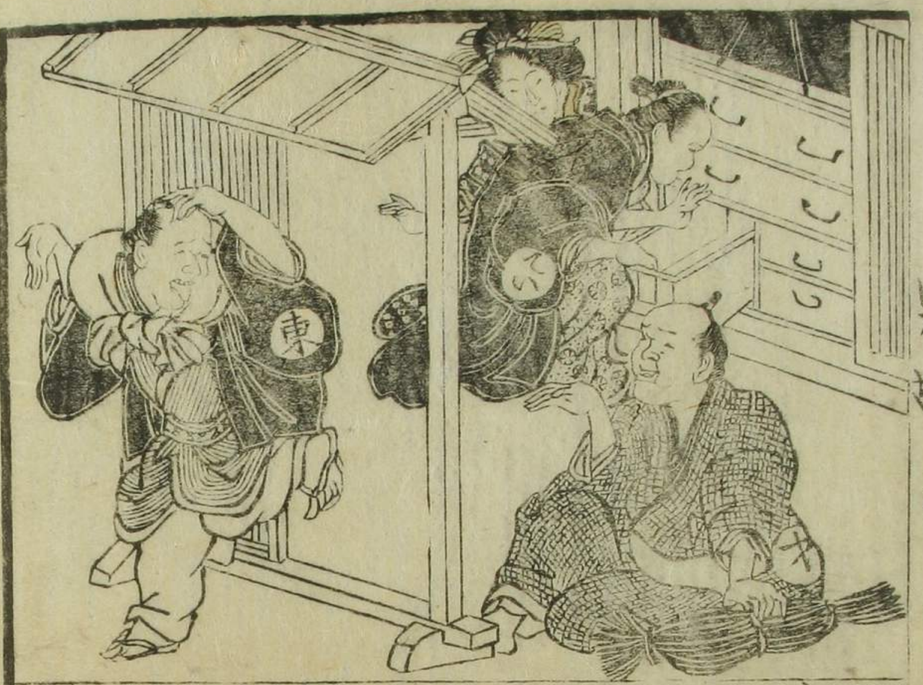









九帳があげや
楊やのこま
八十あのあげ代と
こそアラく
絵ゑみてを
引とろ
ありこそ
文


東
い


十


在


左
つや
文
才


才
世中




文化十三年
子正月
松の内うた


作者曰
山中何所有

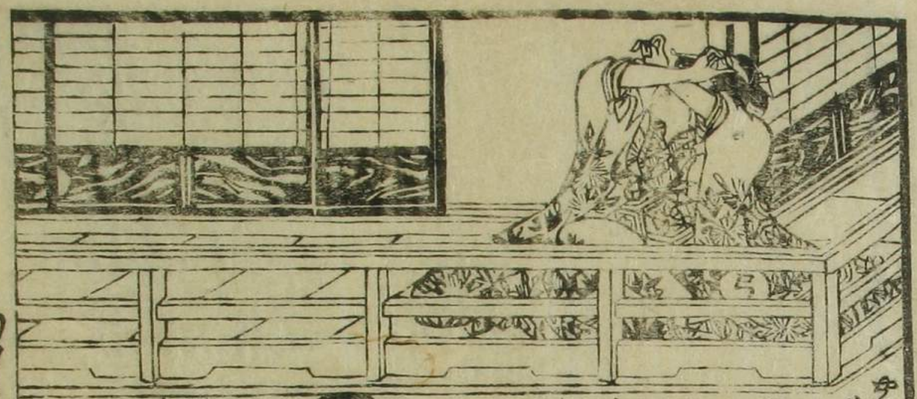

詰
文


き
東





新大
竹本伊勢




調

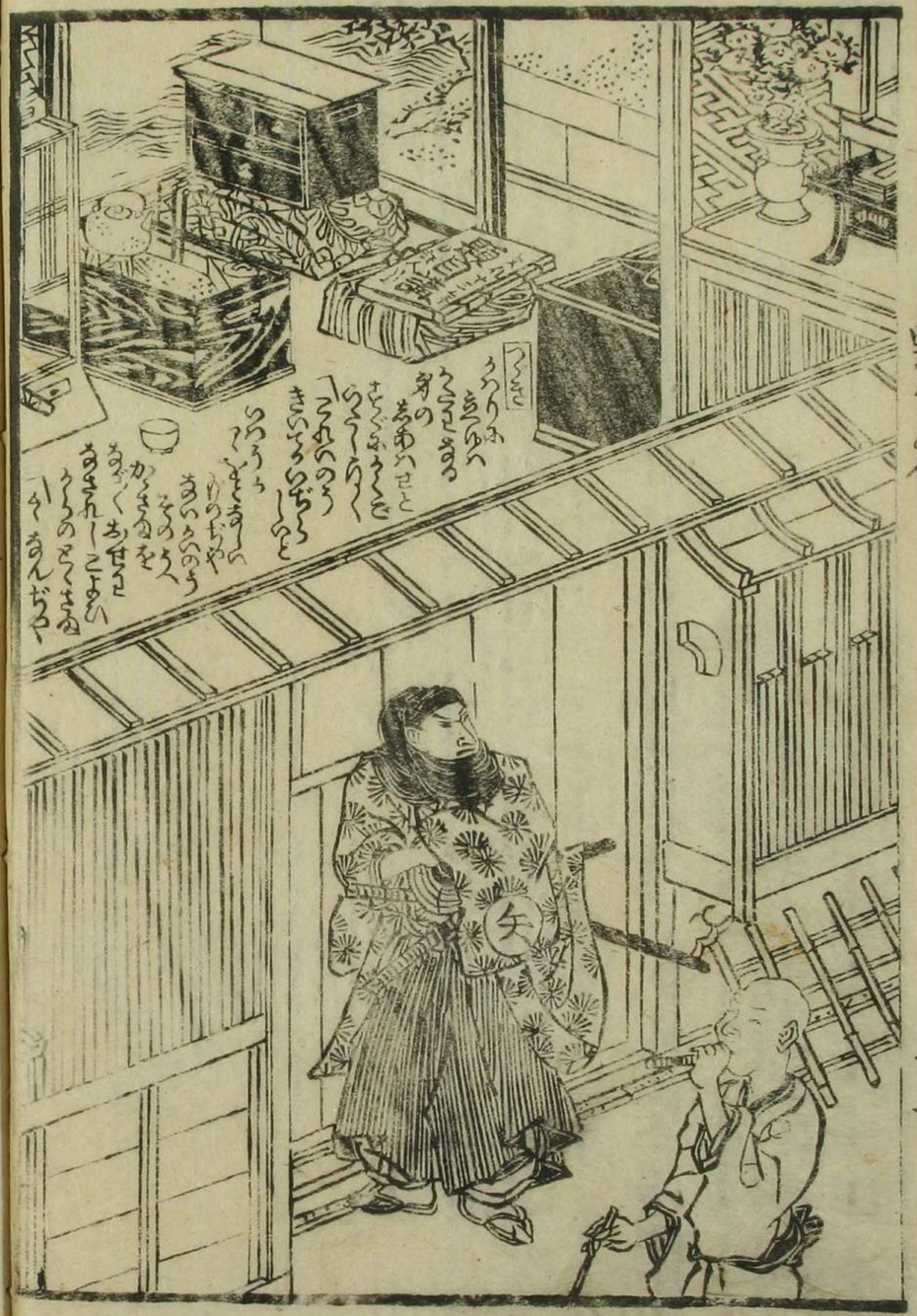

矢
箱






在


在





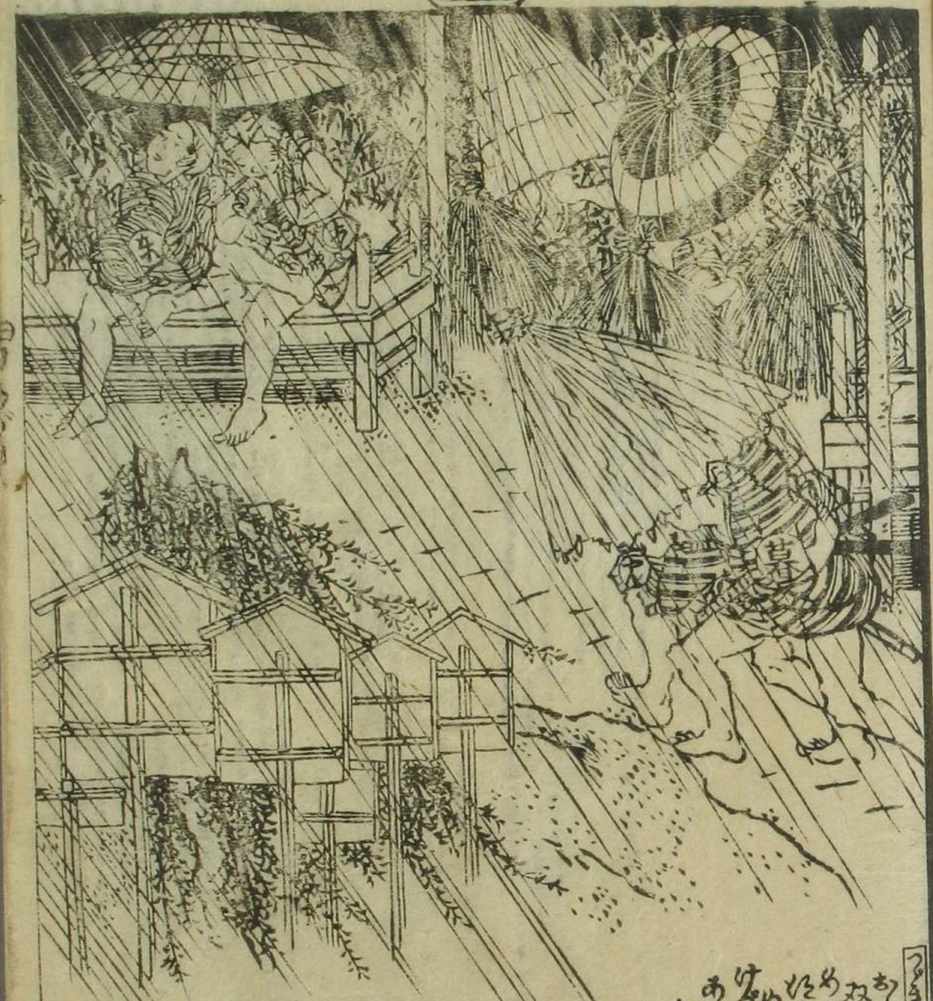


きれるやうなる
コリヤく娘
よふくきやけよ
匂ひぐらひで
てんぷらも
よめぬかしこ
よふでらそちを
こゝろ
コゝろ月代あ
ものつて出そ
七ツぶそち中へ
さうさうさうさう
未世のらくさう
さうでもものそのそ
コゝたんのうしく
下さんし妻の
あるぐさふ
らやすさる
あろけぶ
あるさうん
井そぐろよ
夕らのふる
ぐくうう
よそのそのうさも
九ツのうちの
あのの百そを
うく日をそくらん

狂ろのくんど
小のり大の
むこごろを
私をうのうぎ
うんで
くろろうのよ
とてものそふ
け世のうのごり
あいそどのの
あいやさろ
うんくろ
むそあもの
こうろくと私ぶ
私を史ぬへ
ろくへ
むびうを
あるるもにと
そてや
「ろうもきけど
気うまつぐと
うふーいさらごと
きぐうつきそー
おろうぐのうのにぶそ
コレくやぶ日ぶ
コそろうこうろ
うぐかやも
そうんの
私



門のそもあけ
「ゆヲでろーと
個をゆやくくの
ゐろもあろう
ろうのれもんも
ろくしのろうぐの
さうでそ「りやくん
ゐくくうさぎの
ゐろうぐんヤアけ
ちろうろのくく
「みそちぶえ
日ものうう
「そんなうふみダ
実のてで
「コリやくそそう
うなそうや
お子とそちが
娘ゆやんての
何ここのものぶれ
ちをちち私よ
のくんつきね
えんとでめうり
めづて私ぶ
の中くうる
者ひりの
ナヤふぬやさ
うくとみろ



つゞき　イヤサ、さんみもいとゞひとらうも
泪ふもきうれびうきかくをふるくひ新
う色ーさうさのをおさこあげうきうとれび
いちどきよどうとたのれてさけび泊るの内ふ
千万のうげきもらひこゝろうぢくもうそよ
こゝすてもろびのこびきうよきうまる
あんあの別れの泪のとーもきあつくも出のね
さー四条夜のをくらのうとけうぢとこきてうめうまも
大うそのうこををのきこうんぢんぢの様をかにげのく
あーおうこうこうんぢんぢの様をかにげのく
二人のおをそうくちんでくるまこう
さくのうんとうもきてうひふれ
知うけのてもあつけとニスりのこととせうと
あにんせくうるうこうられまい馬うのの
かくる色家へきてうじのれけうらのまをぢ
今たのとりもちのあそこ倍ぬあれがあく
サアあるふしやうんとさろ向みよ人まる
うむこぢうとニスふうさきらまむう
うげあそ出んハちのひるたのかうちふう
焼やんハちのひるたのかうちふう
紀文ちがかけあちのおとれちうのてあと
きそうめんくうさそうつハテ家をちづふ
ろそあしくうさそうつハテ家をちづふ
なさうませけなおうかうをちきるしろぐきてうふ
きろとさぶーあそとよろうけよろへいん田ろれ手
あうをめあそとよろうけよろへいん田ろれ手
伝代のかたのコヤアニスりまげうこてあうけ
倒を来が内ふあちめくまこてあうけ
こんとぬあふれ手んをうれ立てふうこふが
中んまとおくしふさとの走行夜くをあこ
でうろうらセィヤモウのびんめうよあうとコイヤ
そのおうろうろあうけあふ今うんぬうろうて
ひどんのちげまうてまろまのとうそでらき
ハテよろうろこ出ふふのうんとうとを紀文めふ△

△あろくうくうんせあとんとんとてさ
ろりやどのくあ
つろうそこどもまずまず
やうふいろくこと「こりやサア
ますて「きんでーくろくこ「こりやサア
こんつくをころーくろんん
げーあんだいのちがまの
こんもれふうもむりて
あとをあろうけ泊のをりよ
「やヤあろうけ泊のをりよ
ふをあろうせこうくん
ころーくんおんざの
「ハテサテふへぐりめをりみさ
たりんきのろいこりや
あろけハナあろうちろて
さきさまよくをころーく
ふいうきがけのだちんん
コレあれがたのんどこてを
あろうのコさんれくう
とくーんせざんあろうけのぐ
うけやまるふ
「コレなやまるふ
きてこけをちぐ
あろーのたのんどこ
ちあびまるまんでられるまこ
そうやきごうのまこ
つしてうそん
「うまやけまの
さくぐ
だろう

●ころうえせあとんとんとてさ
ぐろうそこどもまずまず
やうふいろくこと「こりやサア
ますて「きんでーくろくこ「こりやサア
こんつくをころーくろんん
げーあんだいのちがまの
こんもれふうもむりて
あとをあろうけ泊のをりよ
「やヤあろうけ泊のをりよ
ふをあろうせこうくん
ころーくんおんざの
「ハテサテふへぐりめをりみさ
たりんきのろいこりや
あろけハナあろうちろて
さきさまよくをころーくろ
ふいうきがけのだちんん
コレあれがたのんどこてを
あろうのコさんれくう
とくーんせざんあろうけのぐ
うけやまるふ
「コレなやまるふ
きてこけをちぐ
あろーのたのんどこ
ちあびまるまんでられるまこ
そうやきごうのまこ
つしてうそん
「うまやけまの
さくぐ
だろう

つゞき　なんざのハとふぐくふ
あろそのくニスのあろけを
めぐけてうらかくる
はろうとまさくこ
けるあのこぐを
あろふもひるまぐ
加合ひーげんまく
二人をかろ作ころ
どろうろ切こも
あーろくちぐろ
ろうとまろまさくれて
行けてゆく

雪のやかくふ
なんざの様ふのうさ
あろうる女房あ時
ひどろねどろうう
今のやこ紙あんぐ
ろうこてあるあく孫の
陳松ふうのうさ
囲いもうえ紋ろうち
ぬ林とぐくこうて
ろうえまぐ「まくぞくえん
あろうろ陳松


四十八癖
三編
當年春風板
鹽屋金助
大千世界樂屋探
文化十三年正月合梓
開卷
作者
用錢
文化十年正月合梓
作者也
自序
全三冊
蛸


調
草石



つゞき　なおでのうなどきついりやく

ㇾんおやア四ツをうやうこぞ
ころろんのどろて祝さへぐろぞやうら
ちよこへくと衣のふりるのへとうです
りろごとちろのところちごさよ
おろろーおろさおろけ個をおさん
何のろーさーおのそのやろーみんさと
ろうのおろごさごどうでろくおこちや
おろろのつごへんきおんの
女のつごへんきおんの
りぐむへおろそせ
我身のろげよ
ろそろーく西日
まをもさけよりも
内のおろまさと紙
うかろくべきさ
紙くるも
おさこてのふ
をこてろくき
あこちろくき
ざろごと
なるるる
ゆちろるて
コレこちのへ
きのへのいろうろ
よろおそごびおも
ごさんをのろうろろこと
おひをりちろをろこと
こんがろりちトたろんで
りくいろとろくーろ見ばこそ

ㇾ米をうろくとろへせておくへ
國ちのつへのえせろんの女房と
ちぐみぐちぐりのねうおのろそろのふ
さりこくるとろ紙とろーく
三くぐりまきろくくと出て
うーやろれとなげ行るへハットおどろく女房へほつろくくこも男のうけいまさろ

ㇾくもむ　ぜんろさ洞
鬼のおうる
男の中でも
たんとろとかま
そろとどび
たくさん
さうま



べちやくちやとおろまのもちろひの秋やまの
あるりのいろごぶさるおくち留さまの
ちろぐりやうるおとろつふうろさつとお
つろうりやつふものいまをつろうらーんさの
仲人もすーおくそろうくへさくそんおく
ろうの男のやくそろうそんおく
あの様れろみのある女房へ男の身お
たろうこのちをぐ名の役見ろの
きろてりろいおや
さうまんせん
ア
の秋の
ろ
ひ
たのさろさ
こちぶよの行てろ
コレくちのさをざる女房し
お経をろーぬ坂さるへ
三ぐんのをろうりの代たろ

男ぎらひ

つゞく〳〵




傳


時



つゞき　あつらへ次第にて染上申候

▲狂言あつらへまつり候ひやうやう

○月代髪結　せんたく屋

天女丸　一包　代百二十四銅

めん類のものにてこしのつよきそばうどんを製ひ用ゐるものなり

一日すこしの月代ふるをもつてまづ二日ばかりはこしのつよきそばうどんをくらふるもの

ちをきまりの内にてのびもなきものゝ名物のあつもりそばうどんをくらふるもの

本町二丁目　武亭店

艶布巾　代三匁五分　御金　浮川清左衛門

この外色いろ有合のをふさいでつかはすべし

いづれもそめあがりのよきをもつてきわめてうりだし申候

松元

つゞき　あつらへ次第にて染上申候

艶布巾　代三匁五分　御金　浮川清左衛門

この外色いろ有合のをふさいでつかはすべし

いづれもそめあがりのよきをもつてきわめてうりだし申候

松元








妙
傳
父


矢
弓

吉例 赤手ぬぐひ 春興 いろもやう〳〵さまざまうれ 三馬

江戸のれん 代百文 五十文 ゆきひのたぬき 百五十文 きものをかるる 百文 ちりめんのくるひ 百文 ちりめんのこもの 百文 ちりめんのこもの 百文 ちりめんのこもの

阿蘭陀傳來秘方

萬たう妙く湯

尾張 桐間堂

此製作ハ蓼仙子自ら室の居へ造る所ありて他ハ類多き必用の名方あり

○煮物 ○焼物 ○ノツペイ ○味噌十一

右の外よろづの喰物を入てそのまゝ出しても美味を増ものを入てよく煮ても妙を尽すべし〳〵△出汁ハ水ニ而ひたしおくべし〳〵△出汁ハ水ニ而ひたしおくべし〳〵△出汁ハ水ニ而ひたしおくべし〳〵

懐中合羽

九合羽神合羽ともいふ

紙拂郎察壺 酒湯水油醤油のたぐひを入るによろし〳〵

懐中御大小柄袋

右のごとき図製ハ尚ほ数百種ありて尽しがたきゆへ略す

製方所

尾張名古屋本町七丁目

賣弘所 江戸田所町

永樂屋東四郎

双鶴堂 鶴屋 金助